



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の対称表現の社会語用論的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	都, 賢娥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15213号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87165
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hyunah_Toh_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 都 賢 娥

学位論文題名

日本語の対称表現の社会語用論的研究

本論文は、日本語において話者が聴者を指し示すのに用いる言語形式を対称表現とし、その選択と機能、規範の作用と逸脱などを中心に社会語用論の枠組みで多角的に論じた研究である。論文は、序論・第一部・第二部・第三部・結論の5部構成になっている。序論では、まず研究の目的・方法・利用するデータ・論文の構成などについて説明している。

第一部は、第1章と第2章からなり、議論に先立って整理しておくべき予備的議論にあてている。第1章では、対称表現の定義と分類を行っている。日本語では文法範疇としての人称・数・性などを設定する必要はなく、人称代名詞とすることは一般言語学的な規程に合致しないことから、国語学的な自称・対称・他称によって語彙的・語用論的に規定するものとし、「あなた」などを対称詞と呼ぶことにして、これと整合させるために、聞き手を指示する言語形式を広く対称表現と呼ぶと定めている。対称表現に用いられるものには、対称詞のほか、固有名詞と普通名詞があり、これらのほかに「そっち」などの空間指示詞も用いられる。本論では、これらの対象表現の下位区分を一種のカテゴリーと位置づけ、どれが選ばれるか、どうカテゴリー間の変更が見られるかも後章で論じている。

対称表現は表層に現れずに省略されることも多く、「山田部長」のように役職としての普通名詞が固有名詞と複合する使用も珍しくない。本論では対称詞を軸に論考が行われるが、発話の場における話者と聴者の関係によって、選択できる対称表現が制約を受けることも第1章で確認している。

第2章では、対称表現に附属する形式を、敬称・肩書きなどを表す普通名詞（役職や職位も含む自立語）・複数の意味を表す成分（おおむね接辞など）に分け、細かに論じている。敬称は文字通り聴者に対する敬意を示すが、省略することがインポリイトネスに相当する場合もあり、妥当な敬称の選択が規範として要求される場合もある。本論では敬称や普通名詞の付加により直示性が高まると分析されている。また、いわゆる T/V 代名詞に見る複数化による遠隔操作を観察して、日本語の対称表現で複数接辞が用いられると、敬称・普通名詞とは逆に直示性を低下させるものとし、両者を直示性において相反する作用を持つものと位置づけている。

第二部では、第3章・第4章・第5章において、対称詞の選択動機が論じられている。第3章では、日本語の対称詞の「あなた・あんた・おまえ・きみ」に見られる違いを明らかにするため、日本語の対称詞の選択に関わる要因を話者によるコントロールの可能性あるいは容易さの観点から外的要因と内的要因に分けて分析している。外的要因には、性別・年齢・社会的上下関係が想定され、これらは話者によるコントロールが困難あるいは不可能なものにあたる。内的要因に含まれるジェンダー・対人距離・品位は話者が会話の場においてある程度コントロールが可能なもの、容易なものにあたる。これらのうちで対称詞の一般的な選択に強く関わるものは外的要因であり、「相手にどのように伝えたいか」また「どのように見られたいか」という話者の意図と関わる内的要因が強い動機として働けば、各要因が選択の動機として優先的に作用すると指摘している。結果的に、対称詞の中で選択のため考慮する段階が最も複雑なものは「あなた」であるとしている。

第4章では、文脈との関係から対称詞選択を論じており、発話解釈関わる形式文脈・状況文脈・知識文脈がどのように活性化されるかを固有名詞と普通名詞の場合にわけて考察している。対称詞は、形式だけで個人を特定できないが、形式文脈と状況文脈を参照することで、聴者の特定が可能になる。聴者の解釈までに参照される文脈情報が最も多いものは普通名詞であり、3つの文脈をすべて参照することを確認している。固有名詞は定性を有し、形式文脈と知識文脈を参照することで指示が確定する点で普通名詞と異なる。

第5章では、デュ・ボワによるスタンス理論の概念を利用して、対称詞の選択動機を分析している。「あなた」以外に「きみ・あんた・おまえ」を含めて、意味的変遷と現代での使用実態を確認し、対称詞の選択動機として共通的に関与する要素は上下関係であって、加えて、話者のスタンス表示と距離調整が深く関与することを明らかにしている。認識と情緒のスタンスの複合類型を4種類立て、分析を掘り下げている。

第三部は、第6章・第7章・第8章において、対称表現の発話効果を広範に観察し、分析を加えている。第6章では、「あなた」とその変異形態としての「あんた」を主たる対象として論じており、「あなた」では、対人距離を置いて冷静で冷淡な印象を与える役割性を帯びるが、ジェンダーよりも年齢が選択に強く作用すること、「あんた」に比して話者の品位や品格を保持するために選択されること、などを指摘している。十代が親しい友人に対して使う例では、役割性が冗談関係において際立ち、一種のキャラクター形成に用いられることがあると分析している。

第7章では、対称詞とインポライトネスとの関連性を論じている。本論では、対称詞がインポライトネスの実質を持つとはいえないものの、インポライトネス解釈を強化したり確定させたりする手段として機能することはあると結論づけている。また、皮肉やつつこみなど、逸脱的・周辺のインポライトネスに解釈できる例も示している。からかいや冗談は、聴者に対する話者のスタンスが感情的には非対立的なものであり、全体的にはポライトネスとして解釈されるのに対して、皮肉やマウンティングは認識上も情緒上も対立的なスタンスであるため、全体的にはインポライトネスとして解釈されると主張している。

第8章では、第1章で設定した対称表現のカテゴリーについて、カテゴリー間の変更をカテゴリー転換と定義して分析を行っている。特に、その発話効果と対称表現の選択動機との関わりを、固有名詞と対称詞におけるカテゴリー転換を中心に取り上げて、論じている。固有名詞は敬称と共起でき、敬称の選択で固有名詞という一つのカテゴリーの中でも待遇度の差を顕示可能であるため、話者と聴者の「縦」の距離の調整が可能だと主張する。固有名詞から対称詞へといったカテゴリー転換が見られるのは、会話参加者間での無標の選択、ゼロの初期値から「縦と横」の次元の関係を調整する「動的調整」がその動機として作用するためだと指摘している。

結論では、本論における研究上の貢献を5点にまとめ、今後掘り下げるべき課題について記している。

以上